

夢の続き

新 秋田逍遙

文・写真／津島修三

第26回

かつて秋田市大町の秋田魁新報社旧社屋に隣接して、大村洋服店という老舗テラーがあった。

大正4(1915)年の創業。創業者の大村清太郎は、東京銀座の外国人が経営する洋服店で修行を積み、秋田市で独立開業。イギリスから仕入れた生地で作った紳士服で、多くの顧客を得ていた。

清太郎から数えて3代目の大村芳郎は、オートバイを乗り回すアクティブな人で、仕立て屋としての腕もよく、美的センスのある人というのが周囲の評判であった。

その芳郎が洋服店経営の傍ら没頭したのが、フランスの芸術家ルネ・ラリックのガラスアート作品のコレクションであった。ラリックのプロフィールについては割愛する

が、量感あふれるラリック作品は、世界中に愛好家を持つ。

紳士服が大量生産大量販売の時代になり、大村洋服店は平成5(1993)年ごろまで続いたが、芳郎が生涯に集めたラリック作品は400点近くにもなっていた。

「和服は平面で構成されますが洋服は立体構成です。父が絵画ではなく立体的なラリック作品に魅入られたのも、テラーとしての感性が共鳴したのかもしれない」(大村美術館・大村清一郎副館長。芳郎の子息。ちなみに館長は芳郎夫人)

芳郎は、自分のコレクションを多くの人にも見てもらおうと、プライベート美術館の建設を思い立ち、候補地を探していた。たどり着いたのが仙北市角館町の現在の

地。秋田新幹線が開通する2年前のことであった。歴史文化の香り高い角館の地が、ラリック作品に触れるのにふさわしいという判断だったのだろう。

大村美術館は平成7(1995)年4月のオープンだが、そのころ芳郎は白血病を患い入院生活を余儀なくされ、展示プランと館内配置図を書き残しただけで、一度も退院することなく、同年9月に55歳という若さで没した。

自らの生涯の集大成であった自分の美術館には、結局一度も足を踏み入れることは叶わなかった。

「美術館は建てるまでが楽しみで、父の中ではそれで十分だったのかもしれない」(清一郎氏)

(一部敬称略)



写真は清一郎氏とラリック作品の代表作の一つ「タイス」。大村美術館では、約400点の所蔵品を年4回季節ごとに展示替えしている
大村美術館／仙北市角館町山根町39-1・木曜休館(12～3月は水曜も休館)